平成 23 年 2 月 9 日
東京フォーラム
於：湯島聖堂

中斎塾　東京フォーラム
平成 23 年　第 2 回講話

本日はこれだけお寒い中、足元の悪いところよくお出で下さいました。「迷い込んだのです」とおっしゃる方もおられます。昨年も飛び入りでたまたま参加くださった方がおられて、その方はその後もずっとフォーラムに参加して下さったのを覚えています。ここ湯島聖堂は、自然と迷い込むようなパワーのある場所なのかなと感じました。

今日の一冊　―『私の宗教観』―

今日ご紹介する本は、木内信胤先生の『私の宗教観』です。今年は大局観を身につけましょうと申し上げているので、大局観について私が師事したのは木内信胤先生ですので、木内先生のことを今年は何回か取り上げたいと思っています。

木内信胤先生は数え年 27 歳の時に父親と死別しました。それから亡くなるまで、毎朝、3 ページから 4 ページ、法華経を読むのが習慣になっておられました。

宗教について木内先生曰く、「人間はどこかで死というものに対面することになる。死に直接向き合うと、死にたくないと思うのが普通で、そう思った時に畏れや恐怖が生まれる。それが宗教に目覚める一つの大きなきっかけになる。私は数えで 27 歳の時、父親が 61 歳で亡くなった。その時から宗教心を意識するようになった」と書いています。木内先生は自宅に法華経を教えて下さる先生を招いて、5 年間ほど教わったそうです。内閣総理大臣を務めた加藤高明さんの奥様も、ご主人を亡くされた後、その会に参加されていたそうです。

ということで、木内先生の考え方の中には法華経が相当色濃く入ったのだと感じます。何かの心の拠りどころを、人は持った方が良いなと感じます。木内先生は「毎朝法華経を読んでいると、詮索的に読まなくても自然と意味も通じてくるし、自分なりに好きな言葉も出てくる」と書いています。

論語も同じです。この意味は何だろうと自然に調べるのはいいのですが、勉強ということで無理に調べていると、意味は分かっても本質は分からないということになりかねません。何度も何度も繰り返し読んでいくのが良い。それも黙読ではなく声を出して読むと、自然と身体の中に入ってきます。

今日の論語

では、論語の素読を致しましょう。本日の論語は述而第七　10～16 です。

論語の読み方は、その情景が浮かぶと素晴らしい。何度も読んでいると自然と出てくるものです。

それと、論語を読む時は、現代に置き換えて読むのが大きなポイントです。

【十】　子 顔淵に謂いて曰く、之を用うれば則ち行い、之を舎けば則ち蔵す。唯 我と爾とのみ是れ有るかなと。

孔子が顔淵に言いました。

「世の中で私を使う人がいれば、直ぐに出て行って信ずる道を行おう。私を見放して用いないようであれば、隠遁すればよいだけのことだ。こういうことが出来るのは、私とお前の二人くらいかな」

言い方を変えると、孔子は、なぜ私は採用されないのだろう、よほど世の中の君子は見る眼がないね、と嘆いているわけです。論語を読んでいるとそれがひしひしと伝わってきます。孔子は、最後は諦めて教育の道に入りました。

世の中に用いられない孔子と実力ナンバーワンの弟子顔回が、二人でぼそぼそと慰めあっている様が浮かびます。

現代に置き換えて読むと、私が想像したのは都知事選です。4 月 10 日が投票日ですが、“私が立候補したら受かるだろうか。世の中が私を受け容れてくれるようであれば自分の信ずる道を行いたいが、落選すれば出来ない。さて、どうしたものだろう・・・”といった会話している候補者がどれくらいいるでしょうか。

子路曰く、子 三軍を行らば、則ち誰と与にせんと。子曰く、暴虎 馮河、死して悔無き者は、吾 与にせざるなり。必ずや事に臨みて懼れ、謀を好みて成さん者なりと。

孔子と顔淵の会話を、子路が少し離れたところで聞いていたのでしょう。孔子のところに走り寄って、私はどうでしょうかとばかり、「孔先生が大軍を率いて進軍する時には、誰と一緒に行動しますか」と聞きました。

一軍は 12500 人を率いています。天子は六軍を率い、大国は三軍を率い、中ぐらいの国

は二軍を率い、小国は一軍を出すというのが決まっていました。子路は当然自分を選ぶだろうと思って孔子に聞いたわけです。

それに対して孔子が、「お前は冒険心があるけれども、乱暴者で駄目だ。武器を持たずに虎に立ち向かい、舟を持たずに河を渡ろうとする。計画もきちんと立てないで、死んでも後悔しないような者とは一緒に行動は出来ない。慎重に構え、計画を立てて成功するような者と行動を共にする」と子路をたしなめています。

孔子は子路を非常に可愛がっていました。あちこちで衝突したり問題を起こしましたが、問題児ほど可愛いものです。子貢とも顔淵とも違った、ほっと一息つけるお弟子さんだったのでしょう。子路がいなかったら孔子の人生は寂しかったろうと思います。

自分の周りに顔淵と思えるような人物、子路と思えるような人物、或いは子貢と思えるような人物がいるかどうか、時々考えてみるとよろしいでしょう。

昨年私は、＜人生の棚卸し＞ということを申しました。友人・知人も棚卸しをしないといけません。腐れ縁で 20 年 30 年と続いていても、あまり良いものではない。どこかで一度見直しをすると良い。自分の人生は有限であると、どこかで感じるものです。木内先生は 80 歳で、人生の区切りに行き着いたと言っておられます。80 代になって、やりたいこと・やれるだけのことは全てやったなという感慨を持ったので、『私の履歴書』を書くことを引受けられた。これは日経新聞から前々から頼まれていたのですが、70 代の時には断っていました。80 代になって自分の人生一つの区切りがついたと思ったので、書こうという氣になったのです。

私たちも自分の人生、どこかで区切りをつけておく必要があると思います。そういう時に自分の友人・知人の棚卸しが必要だろうという氣がします。

私の同級生には定年退職した人が増えまして、中には、仕様がないなと思う知人が結構います。今後の人生はどうするつもりと聞くと、「大丈夫、もうそろそろお袋が死ぬから、遺産を相続して悠々自適・・・」などと言う友人もいます。何でも話せるのは良いのですが、そうなるとしょっちゅう会いたい氣分にはならない。話をすると、こちらが発奮してプラスの氣持ちになるような友人が周りに沢山いてもらいたいけれども、何となく後向きの友人が増えているのは嬉しくありませんから、やはり棚卸しが必要だと思います。自分の周りを見渡して、今お付き合いしている人の棚卸し、自分自身も棚卸しをするのがよいのではないかと思います。

ちなみに、今年の私のキーワードは「捨てる」です。その判断基準は、70 代になった時に不要であると思うものは捨てるということです。

【十一】　子曰く、富にして求む可くんば、執鞭の士と雖も、吾亦之を為さん。如し求むべからずんば、吾が好む所に従わん。

孔子が言うには、正しい方法で富が得られるならば、鞭を振って馬を御する御者にでも私はなるだろう。正しい道で富が得られないならば、古の聖人の道を私は好むので、好みにまかせて仕事をするようになるであろう。

お金持ちになりたいと思ったら、正しい方法でお金持ちになりなさい。不正な道でお金持ちになっても必ず落ちていくものだ、と考えればよろしい。

現代に当てはめて考えると、松下幸之助さんはどうだったろうか、稲盛和夫はどうだったろうかと思います。今朝のテレビに稲盛さんが映っていましたが、かなりお歳をとったなと感じました。

松下さんと稲盛さんとのつながりで面白い話があります。稲盛さんが松下幸之助さんの講演を聞く機会があって、経営はダム式経営が良い（ダムがいつも一定の水量で満たされているように、われわれも蓄えを持って事業を経営していなければならない）という内容でした。聞いていた人が「どうすれば、そうできるのですか」と質問をしたところ、松下さんが「まず、そう思うことです」と答えた。何か事を起こす時にはまず思い込むことが肝心であるという答えに、なるほどなと思った人はかなりいたと思うが、心から感銘を受けて実行したのは私一人だった、と書いています。

色々な話を聞いても、良い事を言っているなと思っただけではそれでお終いです。実行をしなければ意味がない。木内先生曰く、「私は父親が死ぬまでは、ものを考えるだけの人だった。父親が亡くなってからは、実践の人に変わった」そうです。61 歳で早死にした父親の思いを自分が代わりに実行しようと思って、実践の人に変わった。思ったから変わったわけです。やはり選ばれる人というのは、日頃から強烈に求めている。そうでなければ、答えが目の前に来てもすぐに反応し受け容れられない。自分が求めて、求めて、答えが欲しくて悩んでいると、すっと答えが入ってくるのです。

【十二】　子の慎む所は、斉戦疾なり。

孔子が慎んでいるもの（国家としての重要な行事）は、祭祀と戦争と病氣である。

現代にあわせて考えれば、孔子が慎むものを私たち個人個人も慎めばよいし、国家も慎めばよい。日本という国は天皇陛下が祭祀（国家的な重要な行事）として、常に神官の立場でお祈りをしていると感じます。天皇陛下がおられることで、核（コア）を持っているのだなと強く感じます。自分自身のコアは何か、考えてみるとよいと思います。

戦争については、今や架空のものではなく現実の問題になってきています。北朝鮮がいつ攻めてくるか、ロシアがいつ攻めてくるか、韓国はどうか、アメリカはどうか、具体的にそれどれの国が日本を攻めてくるということを想像して、戦争というものを見る必要がある。別に大砲を打ち合うだけではなくて、経済戦争を仕掛けていると思って戴いてもよろしいでしょう。

私は先日、北方領土返還要求全国大会に行ってきました。この大会は毎年 2 月 7 日の北方領土の日に行われ、内閣総理大臣が必ず出席し、各政党の代表者も一堂に会して話をします。私は昔、日本青年会議所で北方領土返還要求委員会に属しておりまして、ロシアにも行きました。その後、全国大会の招待状が毎年送られてくるので、出かけています。司会者はずっと変わりませんから雰囲氣は同じですが、熱の入れ方が毎年違います。特に警護は変わります。最初の頃は非常に無防備でした。細川総理大臣の時は、殺されては嫌だとばかり警備が強化されました。飛行機の搭乗口のようなセキュリティーチェックがあって、手荷物もチェックするようになりました。今年の全国大会は、かなり無防備な状態で行われていました。菅総理には狙われているという意識がないようです。狙われているという意識があれば、警備体制も違ってきます。ただ、会場の外には実戦部隊がかなりいましたから、警察庁そのものはピリピリした対応だったと思いますが、内部については緩んでいました。民主党だからか、菅さんだからなのか・・・とも感じました。

【十三】　子 斉(せい)に在(あ)りて 韶(しょう) を聞(き)くこと三月(さんげつ)。肉(にく)の味(あじ)を知(し)らず。曰(いわ)く、図(はか)らざりき、楽(がく)を為(な)すの斯(ここ)に至(いた)らんとは。

孔子が斉の国にいた時、舜が作った音楽を三ヶ月間聞いていた。その音楽を聞いていたら、肉を食べてもその味が心に伝わってこない。それほど音楽に感動し没頭した。これは意外なことだ。音楽がここまでのレベルになろうとは・・・という孔子の感慨です。

孔子の音楽・文化に対する入れ込み方は凄いと感じます。食べ物の味が分からなくなるほどのめり込む氣持ちは分かりませんが、音楽を好んで自分の日常生活の中に取り込むというのは良いことだろうと思います。

【十四】　冉有曰く、夫子は衛の君を為けんかと。子貢曰く、諾、吾 将に之を問わんとすと。入りて曰く、伯夷・叔 斉は何人ぞやと。曰く、 古 の賢人なりと。曰く、怨みたるかと。曰く、仁を求めて仁を得たり。又何ぞ怨みんと。出でて曰く、夫子は為けざるなりと。

孔子がお弟子さんを連れて諸国を旅している。衛という国に行った時に、衛の国は内乱を起こして親子で君子の地位を争っている状況でした。弟子たちは、孔先生がどちらを助けるのか議論をしたけれども結論が出なかったのでしょう。

冉有が「孔先生は衛の国の君主を助けるのでしょうか」と聞いたので、子貢が「よし、私が先生に聞いてこよう」と言って、孔子の部屋に入っていって「先生は伯夷・叔斉をどう評価しますか」と遠回しに聞きました。

孔子が「昔の賢人だね」と言いました。

伯夷・叔斉とは孤竹という国の王の息子で、兄弟です。王位をお互いに譲り合って、首陽山に隠遁し、最後は蕨を食べつつ餓死をしたという話は有名です。

更に子貢が「伯夷・叔斉は後悔したでしょうか」と聞いたので、孔子が、「仁を求めて死んだのだから、これは本物だろう。どうして後悔することがあろうか」と言いました。

それを聞いて子貢は部屋を出て、「先生はどちらも助けないだろう」と言いました。

その後、孔子一行は衛の国を出ましたから、子貢の読みは当たったわけです。

背景を少し説明しますと、衛の霊公の妻である南子は淫乱で有名です。以前、衛霊公が奥さんの氣持ちを繋ぎとめるために、他所の国から美男子を呼んであてがったという話をしました。衛の霊公の息子の蒯聵（かいかい）は、淫乱な母親の南子を殺そうとして失敗し、父親の逆鱗に触れ勘当されました。隣国の晉国に逃げて、そこで匿われていたわけです。霊公が亡くなった後、南子は蒯聵の息子の輒（ちょう）を王位につけました。それを知った蒯聵は晉国の後押しを得て王位につこうと戻って来たので、親子で王位争いをしたのです。

その状況下にあって、子貢が、孔子が輒と蒯聵のどちらを応援するのか、単刀直入に聞いても答えてくれないだろうから、伯夷・叔斉の故事で遠回しに聞いたわけです。

現代にあわせて考えると、まともに一所懸命仕事をして、まともな稼ぎをしているのであれば助けるけれども、どちらも不純であれば助けはしないと考えればよいでしょう。

何か問題が起きた時に、まず自分自身の胸に手を当てて、自分はどうだろうと考える癖を

持つとよいでしょう。

【十五】　子曰く、疏食を飯い、水を飲み、肱を曲げて之を枕とす。楽　亦　其の中に在り。不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如し。

孔子が言うには、粗末なものを食べ、水を飲み、肱を曲げて枕にする。楽しみはそのような極貧の中にもあるのであって、不正な手段で富や地位を得ることは、私からみると浮雲のようにすぐに無くなるものだ。

不正な手段で富や地位を得てはいけない。真っ当な道を歩むがよい、と読めばよろしいでしょう。

今の世の中を見ていると、真っ当な道を歩んでいる人は沢山いるのでしょうが、あまり話題になりません。少なくとも自分は真っ当な道だと日々感じられる、そういう機会を作って戴くとよいと思います。

【十六】　子曰く、我に数年を加え、五十にして以て易を学ばしめば、以て大過無かるべし。

この文章は、学者によって解説の分かれるところですが、文章通り 48 歳の頃であろうという解釈が中心です。

孔子が言うには、あと何年かで 50 歳になる頃に易経を学べば、人生大きな過ちをしないようになるだろう。

恒例の質問

私は夜寝る時、5 つの質問を自分にしています。

今日は嘘をつかなかったか？

今日は良い日だったかな？

有難うと言い、有難うと言われたかな？

今日は歩いたかな？

と、一つ一つを自分で確認をとります。私は一日 15,000 歩、一日も休みなく 5 ヶ月間歩き続けて、先日人間ドックに行ってきました。そうしましたら、やり過ぎだと言われました。

普通減量をしようと計画を立てる人は沢山いるけれども、計画通り実行する人はまずいないそうです。これ以上やると低血糖になるからやめなさいと言われ、相談して 10000 歩に変えました。そうしたら楽で、簡単に出来ます。

もう一つの確認は、**明日の夜寝る時に、今日は良い日だったと思って眠れるかな？**　です。これは、過去形で考えるのがポイントです。明日の夜寝る時に、良い日だったなと思って眠る。そういう実感・自覚が出来れば素晴らしい。

では、皆さんにお聞きします。

○　今月に入ってから今日まで、嘘をつかなかった方？

○　今月に入ってから、良い日がずっと続いているなと思う方？

良い日というのは、何を良い日と感じるかによって違いますから、無理やり良いことをみつけてしまうのがポイントです。例えば、食べたいものを食べられたら良い日だったと思う。世の中良いことは沢山ありますから、それを見つける努力をしましょう。

○　2 月に入ってから、有難うと言い、有難うと言われる回数が多かったと思う方？

なかなか難しいですね。自分から「有難う」を連発すればよいかというと、そうではありません。心のこもらない「有難う」はいけません。

念仏婆さんという話が仏教にあります。年がら年中「ナンマイダ」を唱えているお婆さんがいた。毎日念仏を唱えていたから当然極楽に行けると思っていたのに、亡くなったら閻魔様の前にいた。「お前の念仏は口先だけのカラ念仏じゃ。たとえ 1 回でも心を込めて南無阿弥陀仏を唱えた人が極楽に行けるのだよ」と言われたという話です。

余談ですが、木内信胤先生のお父様は、木内先生に「私は、死んだら極楽に行こうと思わない。死んだら両親の元に行きたい」と言っておられたそうです。今日ご紹介した本に書いてあります。これは皆、同じではないかと思います。死んだら両親や親しい人に会えると思うから、死ぬことは怖くないのだと思います。木内信胤先生は、「あの世とこの世はひとまたぎ。立派に死んでみせるから」とおっしゃっておられた。息子の木内孝さん曰く、「父は 94 歳で死ぬと広言していたら、本当に 94 歳で亡くなった。それは素晴らしかった」と。

○　自分自身の健康に氣を遣って、何か運動をしている人？

何でも良いから、少しでも運動をするとよいと思います。

新聞の読み方　― 3 つのキーワード ―

新聞の読み方、新聞をどう読むかについてお話します。前回、新聞を読む時に今年私が氣にするものは３つあると申しました。民主党がどれだけ酷い手を打つか・国債・自然災害、この３つのキーワードでお話します。

＜民主党がどれだけ酷い手を打つか＞

先ほど、北方領土返還要求全国大会に行った話をしました。後日、新聞にはどんなふうに書いてあるか見てみました。菅総理大臣の発言の中に、「メドベージェフ大統領の北方領土訪問は許し難い暴挙である」という表現がありました。もっとも菅さんは下を向いて原稿の棒読みでしたから、おそらく官僚が作ったものをそのまま喋っただけだと感じましたが、その反応としては、ロシアでは激しい反発が大分出ているようです。新聞はあまり大きくその発言を取り上げていませんでした。それよりも前原外務大臣の「私の政治生命をかけて、北方領土返還要求運動に邁進したい」という発言の方が大きく載っていました。前原さんはこの時、本当に政治生命を賭けるのであれば、力のこもった身振り手振りになると思うのですが、普通に淡々と喋っていました。それが新聞に出ると、結構大きく取り上げられている。現場で見たものを新聞で改めてみると、現実をねじ曲げるとは言いませんが、新聞はかなり印象を変えて書いているなと実感しました。ですから新聞を読む時は、半分本当・半分嘘ということを意識して見なければいけないと感じます。

民主党がどれだけ無様な手を打つかという点で、この北方領土返還要求全国大会をみると、外部に向けての発信は民主党も酷いけれども、お先棒を担ぐマスコミも酷いと思います。新聞も幾つか見比べをしなければいけないと感じます。どの新聞にするか、どの記者が書いたかを意識した方がよいと思いました。

＜国債＞

この間、格付けが一つ下がりました。菅総理は「私は疎いものですから・・・」と言いましたが、格付けが下がったことよりも、「疎い」という発言の方が酷いと感じました。この発言が世界に流れて、日本の総理大臣の醜態が喧伝されてしまったと感じます。国債について疎いというのですから、国債がどう動こうと、あまり民主党としては動かないのだろうと思います。

日銀総裁はそれを聞かれた時に答えなかったという記事が小さな囲みでありましたから、国債はやはりずっと意識して見ていく必要がある。その内にとんでもない落ち方をするはずです。

＜自然災害＞

鳥インフルエンザについては、大野参与がおられますので、これからお話を伺います。他に、口蹄疫が氣になります。ただ口蹄疫は人間に感染しても死亡例はないということですので、さほど問題はないと思いますが、心配なのはクールー病というものです。西丸震哉という人が、かつてニューギニアの奥地に行って調べたところ、食人種の中でクールー病にかかって死ぬ部族がいて、彼等は死体の肉、特に頭蓋骨を割って人間の脳みそを食べる習慣があるそうです。脳みそを同じ動物が食べると、とんでもない病気が生まれてくるだろうという氣がします。

西丸震哉さんの本には、「これから人間が遭遇したことのないような新しいウィルスや伝染病がどんどん生まれてくるだろう。クールー病も一つだし、エイズも同じようなものだ」とありました。目をよく見開いてアンテナを張って、自然災害、特に伝染病を氣にされるとよいと思います。

以上で、本日の講話を終了致します。有難うございました。